〔古典研究〕

「サルのヒト化における労働の関与」を読む（中）

── 内在的弁証法 ──

須藤　泰秀*

今回は表題にあるエンゲルス草稿の自己意識，あるいは本質論に相当する部分の論述形式を開示します。ここでエンゲルスは，内容的に言えば，労働の生成史とヒトへの身体進化との連関について説明を展開しています。扱った部分のパラグラフは各々が複数の認識段階，ないし論理段階を含んで構成されていますので，本稿制作の目的に照らしそれらパラグラフの中を段階毎に分解し検討を加えました。

キーワード：自己確信，食い尽くし，本来的な労働，肉食，脳の完全発達，自己意識の自立性と非自立性，火の征服，動物の訓養，ヒトの特殊な放散，自己意識の自由，労働の発展，精神的労働

目　次

序文
Ⅰ　対象意識：客観的対象（ヒト化の在り方）を巡る意識
　1　感性的確信
　2　知覚的認識
　3　悟性的認識
（以上　37巻１号）

（以下　本号）
Ⅱ　自己意識（ヒト化の本質）：意識そのものについての意識の自覚
　1　自己確信の真相──自我と生命
　2　自己意識の自立性と非自立性；および支配者と隷従者
　3　自己意識の自由──自己意識の普遍性

＊立命館大学産業社会学部教授

Ⅱ　自己意識（ヒト化の本質）：意識そのものについての意識の自覚

サルからヒトへの身体進化は，既に利益社会のようなものを発生させている在り方が論述し尽くされており，真無限的なヒト化が指摘されるまですっかり研究者の頭脳に反映した観念になっている。ここでは研究者の意識，すなわち自己意識が自己自身を自分で自覚的に反省してゆく。それゆえ最初は，自己意識には研究者の頭脳に反映している観念たる対象と，自我という二つの対象がある。問題とされなければならないのは，自己意識が自立的な在り方としての自己自身の自由とその実現とを，無媒介なものとして捉え得るか否かということである。

１　自己確信の真相――自我と生命

自己意識は対象がたんなる他者ではなく自己自身でもあると確信しているが，この確信はたんなる主観的確信であるに止まらず客観的真理性を備えている。

（１）我々科学者の主観的観察

今や我々科学者の前で，自我は対象を同一化できると確信している。

（訳14-1）***対象と方法***　木によじ登るサルのあの群れから，ヒトの利益社会とでも評すべき質のもの[1]が生じてくるまでには数十万年もの歳月[2]――と言っても地球史においては，これはヒトの一生における一秒以上のものではない＊――が経過したのは確実。だが，最終的にはそれが定存在することになった。そして我々が，サルの群れからヒトの利益社会を区別する特徴的な相違点として再び見出せるものは何であろうか。***かの労働なのである。***〈S.448〉

＊　この点に関する一流の権威者W・トムソン卿によれば，動植物が棲めるように地球が冷えてから今日までに経過した年数は***１億年をあまり越えていない***だろうと見積もられている[3]。

論理的整理【本質における在り方論】

①　自己意識は一物（ヒト化）の他者としての在り方（サルのあの群れ）と，自己（利益社会とでも評すべき質のもの）とを揚棄し，それらを自己同一（生じてくる）と措定している。

②　しかし自己意識の中では，互いに完全に同等な両者（あの群れと利益社会とでも評すべきもの）は存在し得ず対象は，自我（利益社会のようなものが定存在する）か，非自我（群れが定存在する）か，であってここには第三者はない。

③　しかし自己意識においては，前二項（群れと利益社会のようなもの）が揚棄され対象性と定存在を獲得し，同一の活動性（労働）となる。この事情を，以下に反省してゆくことにしよう。

（２）自己意識の経験

自我が同一化する対象は，客観的なそのままの在り方しか示していない無限であるが，自我はそれが主体的な存在だと思い知らされる。

ｉ　一回目の経験

我々科学者には自己意識内の自我も対象も同じものだと分かっているが，自己意識もこのことを自覚している。自我は対象を同一化できると確信しているがゆえに，それは欲望という形態をとる。

（訳14-2）***自然と無媒介な動物***　サルのかの群れは地理的状態によって，あるいは隣接群の抵抗状態によって，自分たちに割り当てられた縄張りを食い尽くすことで事足れりとし，新しい縄張りを獲得するために移動や闘争を企てたが，しかしその群れは自分たちの排泄物で無自覚に[4]その縄張りに施肥した以外，この縄張りが自然のままに提供する以上のものをそこから引き出す能力はなかった。縄張りになり得る場所は全てが占拠されてしまうや否や，サルの個体数はもう増えることができず，この動物の個体数は同じ水準を維持するのが精一杯だった。しかし動物は全てが食料を限度一杯浪費するので，これに伴って食料の次世代を芽のうちに断ってしまうようなことをする。オオカミは狩人と違って翌年に子ジカを生んでくれるはずの雌ジカを見逃したりはせず，またギリシアにおけるヤギは新清な茂みを成長し切らないうちに食

い尽くすので，この国の山をことごとく食い荒らし禿山にしてしまったのである。〈S.448-9.〉

論理的整理【同一性】

① 本質の第1規定は，本質の自己自身との本質的統一，つまり同一性である。それ（サルのかの群れ）が普遍的規定である点を命題として言い表すと，A＝A（その群れは……この縄張りが自然のままに提供する以上のものをそこから引き出す能力はなかった）ということになる。

② すなわち，「全てのものは自己自身と同等である」（場所は全て……この動物の個体数は同じ水準を維持するのが精一杯だ）という命題である。

③ そのことを否定的に（食料を限度一杯浪費する）矛盾の命題で言い表すと，「Aは同時にAと非A（動物は全てが……見逃し，……食い尽くす）ではあり得ない」ということになる。

ii　二回目の経験

自己意識は自己自身を疎外し，このことによって対象性と定存在を獲得する。欲望たる自己意識によって否定的なものと知られている対象は，それ自体としては自己意識と同じように自己回帰しているものであるから生命である。

その１

自己意識が規定されることは，同時に自分で自分を規定することである。

（訳14-3）***食い尽くしと適応***　動物が行うこのような「乱伐」は，種が次第に進化してゆくうえで重要な役割を演じる[5]。それというのはこの乱伐のため，動物は食べ慣れない食料に適応せざるを得なくなり，その結果それらの血液は別の化学的組成を持つようになり，それらの身体構成全体が次第に変わってゆくからであり，他方で一度固定してしまった種は絶滅してしまうからだ。我々の祖先がヒトになってゆく[6]には，この乱伐が預かって大きな力のあったことは疑いを入れない。〈S.449.〉

論理的整理【差異性】

① 本質の第２規定は区別である。

② これ（乱伐）は最初は差異性であって，互いに無関係な，しかし何等かの規定（食べ慣れない食料）によって区別された定存在の規定（次第に変わってゆく）である。

③ それを表すのは，「互いに完全に同等な二物は存在しない」（我々の祖先がヒトになってゆく）という命題である。

その２

自己意識は，差異性のモメントとしての同等性から肯定的なものが，不等性から否定的なものが生じていて，これらが同一状態の中にあることを経験する。

（訳14-4）***ヒトへの進化***　その知恵[7]と適合素質とにおいて，他の種全てを遥かに凌駕していたサルの何等かの種にあって，乱伐の結果は次のようなものだったに違いない[8]。すなわち，食用植物の数が益々増えるか[9]，食用植物の食べられる部分が益々余さず食べられるようになるか，要するに食料が一層多様になって，これに伴ったことは体内に流入してゆく物質が一層多様になるか[9]，サルがヒトになってゆくための化学的諸条件が一層多様になるかだったのである。〈id.〉

論理的整理【対立】

① 次（乱伐の結果）は，肯定的なものと否定的なものとの対立の規定である。

② ここでは一方の規定性（食用植物の数が益々増える）は，他方の規定性（食用植物の食べられる部分が益々余さず食べられる）の媒介によってしか措定されない。二つの規定性各々は他方がある限りでしか存在しないが，同時に各々は他方でない限りでしか存在しない。

③ これを表す命題は「或るものはAか非Aかであって，第三者は存在しない」（これに伴ったことは体内に流入してゆく物質が一層多様になるか，サルがヒトになってゆくための化学的諸条件が一層多様になるか）である。

ⅲ　三回目の経験

すると対立に潜在していた同一性が，この矛盾の露呈によって顕在化する。

（訳14-5）***本来的な労働***　しかしながらこうしたことはまだ，本来的な労働ではなかった。労働は，道具の製作とともに始まる。では，我々の見出す一番古い道具は何であったろうか。有史前のこれまでに発見されたヒトの遺物から判断して，また最古の歴史上の諸部族や現存の最も原始的な未開人の生活様式から判断して，一番古い道具は何であったろうか。狩猟の道具と漁労の道具だったのであり，前者は同時に武器でもあった[10]。〈id.〉

論理的整理【矛盾と根拠】

① 本質の第３規定は，その中において措定された諸規定（こうしたこと）が普遍的に揚棄されたもの（本来的な労働）である。

② その限りで，この第３規定は根拠としての本質である。

③ 根拠を表すのは，「全てのものは自己の十分な根拠を持って存在する」（一番古い道具は……狩猟の道具と漁労の道具だった）という命題である。

ⅳ　自己意識のまとめ

欲望としての自己意識は同一性から差異，対立，矛盾という展開に沿って経験してきて，根拠を挙げることができるようになった。

（訳14-6）***肉食の意義***　ところが狩猟と漁労は[11]，菜食一辺倒から菜肉雑食への移行を前提する。そしてここで我々はまたしても[12]，ヒト化における本質的な一歩を見出す[13]。***肉料理というものは***，身体の新陳代謝に必要な最も本質的な物質をほとんど出来合いの状態で含んでいた。それは消化時間を短縮するとともに植物のような，すなわち消化時間を除いた植物的な生活に対応する身体上の諸事象に必要な継続時間[14]を短縮し，こうして本来の動物的な（動物のような）生活を実行するためのより多くの時間と，より多くの素材と，より多くの意欲とを生んだ[15]。そして，生成しつつあったヒトが植物から遠ざかれば遠ざかるほど，それはまた動物界をもそれだけ超越するようになっていった。肉食とならんで菜食にも慣れたことが野生のネコやイヌをヒトの家来にしたように，菜食とならんで肉食にも慣れたことが生成しつつあったヒトに体力と自立性を与えるのに本質的に役立ったのである。〈id.〉

論理的整理【本質論の端緒】

① 本質（本来的な労働）は出発点としての定存在（菜食一辺倒）から，自己内（ヒト化）へ反省し媒介（菜肉雑食への移行）するものであった。

② しかしここの根拠で本質は，自己内反省でもある他者内反省を含み，同時に他者内反省でもある自己内反省をも含んだ，全体

的で具体的な（ヒトが植物から遠ざかれば遠ざかるほど，それはまた動物界をもそれだけ超越する）媒介であり，ここでの本質の自己統一は今や自己区別を揚棄し，したがって媒介を揚棄するもの（肉食にも慣れたこと）になっている。

③　かくして根拠（肉食）が端緒で，本質的な（本質的に役立った）ものであることが認識される。

（3）我々科学者のまとめ

その全体的で具体的な媒介には自己意識が含まれてもいるから，自己意識は他の自己意識の中でしか満足を得ないということであった。だから我々科学者から見れば，自己意識が他者を自覚することは自己を自覚することであり，自己を自覚することは他者を自覚することであり，かくして自己意識の顕在化なのである。

（訳14-7）***脳の完全発達***　しかし，最も本質的なことは肉食が脳に及ぼした作用であって，脳には今やその栄養と進化とに必要な物質が，以前より遥かに豊富に流れ得るようになり，それゆえ脳は世代から世代へ一層急速かつ完全に発達することができた。菜食主義の先生方には失礼ながら，肉食なしにヒトは完成しなかった。たとえ我々の知っている部族の全てにおいて肉食からいつか或る日，カニバリズムが生まれた（ベルリン人の先祖たるヴェレターベン人ないしヴィルツェン人は，10世紀にもなってまだ彼らの両親を食べていた）としても，そのことはもはや今の我々にとってはどうということもないのである。〈SS.449-50〉

論理的整理【相関性】

①　根拠（肉食）はその本質の規定（最も本質的なこと）として，根拠によって根拠付けられるもの（脳）を持つ。

②　しかし，根拠と根拠付けられたものとの連関は，根拠付けられた（急速かつ完全に発達することができた）定存在（脳）が，同じように定存在である根拠（その栄養と進化とに必要な物質）と異なる形を持つにもかかわらず，反対者への純粋な移行ではない。

③　ここで中心となる規定は，両者に共通な相関性という内容である。

2　自己意識の自立性と非自立性；および支配者と隷従者

観察対象は今や，研究者の主観領域内部におけるこれまでの自然のままの自己意識から，むしろ他の自己意識の方へ移ってきている。だから自己意識は，自我＝自我である。

（1）自己意識の一回目の経験

我々科学者にとっては今や，主観が同時に客観的でもあるような主観であるという自己意識の概念は，次に自己意識に対してはなお他者，他の自己意識があるという関係におかれている。

i　無媒介な自己意識

この自己直観は自己同一性という抽象的契機であるが，しかし各々は他者に対して外的な客観という規定を持っていて，かくして絶対的に独立している。

（訳15-1）***新しい進歩***　肉食は，決定的な意義を持つ新しい二つの進歩へ通じた[16]。すなわち，火の征服[17]と動物の訓養へである。〈S.450〉

論理的整理【根拠から物へ】

①　根拠（肉食）はその内的規定（意義）に

よって，自己自身を定存在（新しい進歩へ通じた）と措定する。

② この定存在（火の征服と動物の訓養）なるものは，根拠（肉食）から出てきたものだという意味で或る種の現出存在である。

③ 現出しているものは，現出存在の諸規定全体として物と言われている。

ⅱ 生死を賭けた戦い

自己意識は他者に対して，自立的な在り方としての自己自身の自由が承認されることを要求する。二つの自己意識はそれぞれが，自己の対自存在を主張し合って生死を賭けた戦いを展開せざるを得ない。

（訳15-2）***直接的な解放手段*** 前者は食べ物をいわば既に半ば消化した状態で口に入れることによって消化過程をさらに一層短縮させ，後者は狩猟に加え規則的な肉食のための新しい供給源を開発，このことによって肉食を豊富にし，そのうえ乳や乳製品といった成分的には少なくとも肉に劣らぬ栄養価の新しい食料を供給した。こうしてそれら両者は既に，ヒトにとって直接的に新しい解放手段になっていた。〈id.〉

論理的整理【物】

① 物は，他者内反省という契機の側面から見ると諸区別（前者……，後者）を持っているが，自己内反省（意義）としては自己同一性（成分的には少なくとも……劣らぬ栄養価）を持っている。

② しかし，物の諸々の属性（消化過程をさらに一層短縮させ，……新しい食料を供給した）は物の在り方の規定ではあるが，これらの規定は相互に無関係な差別性を持つ。

③ 同様に物（両者）は単純な自己同一性として無規定的（ヒトにとって直接的）であり，規定である諸々の属性に対して必然的な関係を持たない。

ⅲ 戦いの結果

特定の現実の中で相互承認の原則とともに，両者間に支配と隷従の関係が現れる。

（訳15-3）***間接的な諸成果*** それらの間接的な諸成果もまたヒトの発達にとって，そして利益社会の発展にとって大変重要ではある。〈id.〉

論理的整理【質料】

① それら諸々の規定は物性（新しい解放手段）という点で自己同一である。

② すなわち，物とはそれら諸々の属性間のこの同一性（解放手段）に外ならない。

③ それゆえ物はこの点で，自立的な諸質料（間接的な諸成果）としての物の諸属性（ヒトの発達にとって，そして利益社会の発展にとって）に分解される。

ⅳ 我々科学者のまとめ

しかし，自立性は感性的で無媒介な定存在以外の自由，またその定存在からの自由ではなく，むしろその定存在の中における自由であって，この意味で非自立性である。

（訳15-4）***まとめ*** しかし，ここでその詳細に立ち入って述べれば本題から離れすぎることになってしまうのであろう。〈id.〉

論理的整理【物から現象へ】

① しかし質料は，何等かの物として統一される時は相互に浸透し合うことになり，たんなる質料としては解消する。

② だから物はそれ自体が，このような矛盾である。

③ 換言すれば物は，元来が解消する（本題

から離れすぎる）ものであり，つまりは現象である。

（２）自己意識の二回目の経験

対立的な二つの自己意識のうち，自己の自由を主張し切った方は支配者の地位に昇るが，自由よりも生命維持を選び感性的定存在を捨象し得ない方は隷従者の地位に落ちる。

ⅰ　支配者の経験

感性的定存在を捨象し，自己が絶対的な対自存在，全体者であることを示した自己意識は支配者である。

（訳16-1）***ヒトの特殊な放散***　ヒトは食べられるもの全てを食べることを覚えたように，気候いずれの下でも生活することを覚えた[18]。彼らは地球上，居住できる所ならどこへでも放散した。彼らはそのようにするための完全な能力を，自分自身に備える唯一の動物だった。〈id.〉

論理的整理【全体と部分】

① 部分（ヒト）は自分の規定（生活）を，全体（全て）の中でしか持ち（覚え）はしない。

② 全体（どこへでも）が，部分（彼ら）を部分とする（放散した）。

③ しかしまた逆に，部分（彼ら）が全体を構成する（そのようにする）。

ⅱ　隷従者の経験

自己の独立性のために，自己自身で感性的定存在を捨て切れないような自己意識は隷従者である。

（訳16-2）***動物の適合***　他の動物で気候の全てに慣れたものがあったとしても，そのように独習したわけではなくヒトのお供をして学んだにすぎない。家畜や害虫がそれだ。〈id.〉

論理的整理【威力と外面化[19]】

① 内容的に（他の動物で）整理しておく。

② 威力は自己の外面化（慣れ）において，元々の威力を現示する。

③ したがって，威力の内部（独修）にないものは威力の外面化の中にない（ヒトのお供をして学んだにすぎない）。

ⅲ　奉仕

隷従者は自己自身の欲望を否定するとともに，労働によって外にある物を積極的に形づくる。

（訳16-3）***新しい活動***　そして，気候が年中一様に暑い原産地から一年が冬と夏に分かれる比較的寒い地方へ広がって行ったということは，新しい欲求――寒気や湿気を防ぐための住居と衣服――を作り出し[20]，それとともに[21]新しい労働分野と新しい活動を作り出した。〈id.〉

論理的整理【内面と外面】

① 外面（暑い原産地から……比較的寒い地方へ）は内面（広がって行ったということ）と内容面での規定としては同一である。

② しかしそれらは形式面での規定としてはたんなる自己同一（新しい欲求）と，たんなる多様性ないし実在性という形（住居と衣服）で対立している。

③ しかし外面（新しい労働分野）と内面（新しい活動）は，内外関係という一形式の二つの契機であるから本質的に同一である。

（3）我々科学者のまとめ

個別性を疎外した真の自己は，自己意識が普遍的な意志に移行する，すなわち積極的な自由に移行するための契機なのである。

（訳16-4）***まとめ***　こうしてヒトを動物界から一層引き離したのである。〈id.〉

論理的整理【現実性への移行】

① そのまま（こうして）外面化は内面化である。

② 換言すれば，外面化はかえって全体という統一への総合（ヒト）である。

③ そして全体は，このことによって初めて現実性に移行する（動物界から一層引き離した）。

3　自己意識の自由――自己意識の普遍性

普遍的な自己意識は他の自己意識から区別された，すなわち自己に対する特殊な直感ではなく，それ自体として本質的に存在している普遍的な自我としての自己に対する直感である。

ⅰ　自己意識の自由

それゆえ普遍的なこの自己意識は，自己の中に自己自身と他の諸々の自己意識とを承認し，同時に他の自己意識からも承認される。

（訳17-1）***労働の発展***　ヒトは手や発話器官や脳を一緒に働かせたおかげで，しかも個人一人ひとりとして一緒に働かせただけでなく，かの利益社会の中でも一緒に[22]働かせたおかげで[23]，一層複雑な作業を行い，一層高い目標を掲げ，そしてこれに到達することができるようになった。労働そのものも世代から世代へ進むたびに，一層完全で一層多面的な別のものになっていった。狩猟と牧畜に加え農耕が現れ，さらにこれに加え紡績，金属加工，製陶術，航海が現れた。商工業とならんで遂に芸術や科学が現れ，種族は民族と国家になった。法や政治が発展しそれに伴って，ヒトに特有な諸々の事柄がその頭脳の中に作り出した幻想的映像たる宗教も発展した[24]。これらの形象は全てが初めは頭脳の産物として現示したが[25]，ヒトの諸利益社会を支配するかのようにも思えてしまったので，それらの前では労働する手の細やかな産物は影が薄くなってしまったのである。〈id.〉

論理的整理【現実性】

① いかなるもの（ヒト）でさえもが，自己そのものが諸規定の総体性（手や発話器官や脳を一緒に，個人一人ひとりとして一緒に……，かの利益社会の中でも一緒に……）であるという意味では，真実可能な（一層高い目標を掲げ，そしてこれに到達することができる）ものである。

② ところで，このような内的な完全可能性を持つもの（一層完全で一層多面的な別のもの）は，たんに措定された在り方ではなく，絶対的な在り方，したがってそのまま現実的である。

③ その意味で，変化内での自己同一たる実体の可能性（別のもの）はその現実性（これらの形象）であって，必然的な可能性（頭脳の産物として）である。

ⅱ　理性への移行

こうして自己意識は他者の中に自己の反映を見るようになり，また純粋な精神的普遍性として，自己を家族等々に属すると見，己こそが本質的な自己だと自覚するようになると，自己意識自体のこの本質的な普遍の実在的基礎となるのである。

（訳17-2）***精神的労働***　しかも労働の計画を立てる頭脳は既に利益社会のごく初期の発展段階（例えば既に，単純な家族内）においてさえ，計画された労働を自分以外の者の手で遂行させることができたからなおさらそうであった。文明の急速な進歩をもたらした功績はことごとく頭脳に，脳の進化と活動によるとされた。ヒトは自分たちの行為を自分たちの欲求によって説明せず（その際欲求は，もちろん頭脳に反映し意識に上りはするが），自分たちの思考によって説明することに慣れてしまった。――こうして時が経つにつれ，あの観念論的世界観が生まれてきた。これは殊に古代世界没落以降，ヒトの頭脳を支配してきたもの。今でもこの世界観はまこと盛んに流布しているので，ダーウィン学派の最も唯物論的な自然研究者たち[26]でさえもが，そのイデオロギー[27]の影響でヒトの発生に当たって演じた労働の役割を認識できないため，未だヒトの由来に関し明確な表象を持ち得ていないのである[28]。〈SS.450-1.〉

論理的整理【実体と偶有】

① かの実体（頭脳）の中で変化する偶有性の連関（計画された労働）は，必然性（遂行させること）である。

② 必然性（功績）は，可能性（脳の進化）と現実性（活動）との統一である。

③ 連関（行為）がたんに内的（思考）である限り，換言すれば現実的なもの（説明）が同時にその諸規定それ自体としての統一であることがあらかじめ分かっておらず，諸規定の関係から結果としてしか必然と分からない（ヒトの発生に当たって演じた労働の役割を認識できない）限り，必然性は盲目（明確な表象を持ち得ていない）である。

注

1） サルの「群れ」には既知の含みを表す定冠詞が，ヒトの「利益社会」には評辞の不定冠詞がついている。

2） 利益社会のようなものは「すっかり出来上がったヒトの登場とともに新たに加わった一要素」だとされていたから，今日の見解では，それの発生までにはざっと500万年もの歳月が費されたということになる。木登り垂直攀縁動作をする，つまり木によじ登るサルの或る種から，最初に分岐した直立二足歩行をするヒトの祖先は，学界レベルでは580～520万年前頃にエチオピアに棲息していた，繊維植物食と考えられ得る「アルディピテクス・ラミダス・カダバ」だと推測されていて，この化石に関する報告はT・ホワイトらによって，2001年7月12日付*Nature*誌175ページ以下に公表されている。

3） 現代の研究者たちは，動植物が棲めるように地球が冷えてから今日までに経過した年数は15億年くらいだろうと考えている。

4） エンゲルスはヘーゲルに倣って，ヒトとヒト以外の自然との決定的な違いを自己の存立根拠に関する自覚の有無においている。

5） 環境による自然選択だけでなく動物が環境を選択することも放散や進化の原因だ，といった因果関係がCh. E. Eltonの*Animal Ecology and Evolution*. Clarendon, London, 1930, p.51, & 71などを引用して，さも20世紀における新発見のごとくに紹介されたりする。しかし，こんなことなら相互作用という一層高い認識水準においてエンゲルスだけでなく，既にヘーゲルが1807年に*Phänomenologie des Geistes*. Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1976, S.197.〔『精神の現象学』上巻，金子武蔵訳，（岩波書店，1971年），258ページ〕，「生物を観察する理性」で指摘していた。このことはかの偉大な弁証法論者たちにとっては至極当たり前の捉え方であったが，もしかすると当時の生物学では言わば常識だったのかもしれない。そういえば，悟性的思考というやつは以前のことをすぐ忘れるとはヘーゲルの言であった。

6） アルディピテクスを含めたアウストラロピテ

クス，ホモ・エレクトゥス，ホモ・ネアンデルターレンシス，ホモ・サピエンスという種差は論理的には，ヒト化における差異性として整理される。

7） このIntelligenzは「知能」とか「知力」と訳されているが，ここでは知的能力や論理学上の「力」というカテゴリーを表しているわけではなく，サルでさえもが身に備えている頭を使う素質を意味しているので，W・ケーラー著 *Intelligenzprüfungen an Menschenaffen*. J. Springer, Berlin, 1921の邦訳タイトル『類人猿の智慧試験』，宮孝一訳，（岩波書店，1938年）を活用して「知恵」という語を採択した。

なお，素質と能力との異同および連関については，牧野紀之「素質・能力・実績」『生活のなかの哲学』，（鶏鳴出版，1974年），89ページ以下を参照。

8） エンゲルスはイーストサイド物語のような環境の激変，つまり外的要因のヒト化への影響を無視したり意義を低いものと見做したりはしていない。実際現在では，サルをヒトへ進化させるほどの「乱伐」は環境の激変なしに起きなかったことが，アルディピテクスを含むアウストラロピテクス類の歯や棲息域によって証明されている。リーフ・イーターと考えられる彼らは，後退してゆく森林にあくまでしがみつこうとしていたが，しまいには疎開林や川辺林へ取り残され，とうとう平地へ放散せざるを得なかったのである。その後の氷河期における厳寒期と間氷期との繰り返しがアウストラロピテクスや，ホモ・エレクトゥスや，ホモ・ネアンデルターレンシスを絶滅させた要因の一つであったことは周知の事実。それどころか60万年前にホモ・ネアンデルターレンシスと分岐したホモ・サピエンスに至ってさえ，分子人類学が現生人類たる現代型ホモ・サピエンスの直接的な先祖は，20万年近く前のサハラ以南に居た推定総数5千人くらいの生殖女性個体を抱えた単一種集団から発生してきたという「ミトコンドリア・イヴ」説を唱え，現在ではこの説が学界レベルでほぼ承認されている。

9） ここのコンマはoderの代わりであるが，これは言い換えではなくむしろentweder 〜 oderと同義である。食用植物の数が増えたとしても，それを余さず食べられるようになるとは限らない。また，サルがヒトになるには体内に流入する物質の多様化が必要な前提ではあるが，その多様化が必ずしもヒト化に必要な化学的諸条件の一層の多様化に結び付くとは限らない。

10） 今日までの研究結果では，人類最古の道具は300万年近く前の原初型石器，小石を打ち砕いただけの簡単な石核と剥片石器だったとされている。前者は小猟獣狩猟での石礫として，あるいは死肉に先着していた他のスカベンジャーを追い払う程度の武器として役立っていたのかもしれない。

11） 今では「石器を駆使しての小猟獣狩猟と死肉解体」と言わなければならない。

12） ここに「またしても」という副詞が用いられていることから分かるようにエンゲルスは，ヒト化という結果が何等かのヒトニザルの食欲充足に基づく内因が原因となってもたらされたとするがごとき因果関係，すなわち研究者の多くが得手としている悟性的思考で事の成り行きを説明しているのではない。先の在り方論でヒト化における決定的な一歩は第一に直立二足歩行，第二に手の自由，最後に労働とこれに続く発話の発生が挙げられていたことを思い出し，後出の文章を読めば一層よく理解できるはずであるが，ここでエンゲルスはそのような因果関係を中軸にした相互作用という運動の形式，優れた知恵と適合素質を基にヒトの祖先は，環境変化と適合能力との相互作用の中で適合能力が段階を追って開発され，さらに開発された適合能力が逆にその素質と知恵のレベルを次第に高めてゆくとする「存在過程自身の円環性」〔許萬元『認識論としての弁証法』，（青木書店，1978年），157ページ〕を目の当たりにしている。そして，この運動の中に現れているヒトの可能的本質としての食料生産と，肉食というヒト化の根拠を自覚し，これによってヒトの真無限的進化を反省するのである。

このように考察すると伊藤嘉昭氏のヒト化に関する著述は，唯一「弁証法的唯物論の正しい

適用」だったかに思えた，ヒトニザルの食料問題が原因でヒトの祖先の地上進出が結果したとする内因説の採用は結局が因果関係でしか考えられておらず〔伊藤嘉昭『人間の起原』，（紀伊国屋書店，1978年），121ページ，および『サルが人間になるにあたっての労働の役割』，（青木書店，1976年），80-1ページ〕，エンゲルスの先見性を1966年に強調し，若干の示唆を与え，「アウストラロピテクス賛歌」を歌い上げた意義には大きなものがあったのだが，弁証法や相互連関などを用語としてはそれらの本に鏤めはしたけれど，残念ながら思考様式は悟性の権化で，事実確認をアト・ランダムに並べただけのお話にしかすぎなかった。そもそも食料問題を取り上げた後，肉食の役割に触れる直前で，ヒトの祖先が地上へ放散した謎解きを挿入すること自体が非弁証法的非科学的で，認識論的論理学的に何の必然性もない。

13）　ここまで読んでヒトの特種化原理，ヒトの可能的本質とは石器の製作使用に基づく食料生産だということが分かる。すなわち「本来の労働」が意味していることは，チンパンジーのシロアリ採食時に見られるような道具製作，アリ釣り用の釣竿を作りはするが採集物を直接，口に運ぶしか能のない道具の製作だけでなく，ギニア共和国はボッソー村のチンパンジーにおいてアブラヤシを砕き，中身を食べる時に見られるような拾った石による外的必然，偶然的な石器使用だけでもなく，両規定の統一，石器を製作しこれを用いて死肉の皮を剥ぎ肉を食べ易く切り取り，骨を砕いて栄養豊かな骨髄を取り出すというような食料生産であって，よって以って摂食対象の自然との無媒介性を断ち切ることに「またしてもヒト化における本質的な一歩」を見出せるということなのである。だからこそ，ヒトは「彼らの食料を生産し始めるや否や自分を動物から区別し始める」〔マルクス，エンゲルス 1845-6『ドイツ・イデオロギー』，マルクス・エンゲルス全集，第３巻，大月書店，21（原）ページ〕と，ヒトの可能的本質を規定することができた。なお，この引用文で食料と訳したLebensmittelは社会科学では「生活諸手段」と訳されるのがほとんどだが，この場合には「最広義のLebensmittel」〔エンゲルス 1873-82『自然の弁証法』，全集，第20巻，565（原）ページ〕ということになる。

ちなみに指摘しておけば，人間の現実的本質は「利益社会的諸関係の総和」〔マルクス 1845「フォイエルバッハに関するテーゼ」，同上書，6（原）ページ〕であり，かくして将来的には人間を可能的本質と現実的本質との統一たる「類的存在」〔マルクス 1844『ユダヤ人問題によせて』，全集，第１巻，370（原）ページ〕と規定し得るようになるのである。現状のままでは，疎外された「類的存在」。

14）　生命維持のために植物が根から水分や養分を吸い続けているように，動物がそれらを求めて，例えばゴリラが巨体維持のため四，六時中植物性食料を求めて一定地域を遊動し続けるその時間。時空的に直接，自然に拘束されている点で両者の生活に大差はない。

15）　gewinnenには「を生ずる」という訳語がある〔小牧健夫他『独和辞典』増補版，岩波書店，1971年〕。

16）　肉食が火の征服に通じたとする考えは，根拠薄弱だが「他にうまい説明はみあた」らないから，恐らく正しかっただろうと伊藤嘉昭氏は推測している〔伊藤嘉昭『サルが人間になるにあたっての労働の役割』，83ページ〕。

17）　ここでの火の征服はundを以って動物の訓養と併置されているので，ホモ・サピエンスに進化してからの人為的な発火技術開発のことである。伊藤嘉昭氏はそれを，論証抜きで「木をこすりあわせて火をつくること」と断定している〔同上〕が感心しない。もっとも氏としては，「摩擦火はヒトに一自然力に対する支配力を初めて与え，それによって最終的にヒトを動物界から分離させた」〔エンゲルス 1876-8『反デューリング論』，全集，第20巻，106-7（原）ページ〕という指摘を思い浮かべていたのかもしれない。だとしても，エンゲルスは「木をこすりあわせて火をつくる」とは言っていない。石器製作中に自覚したかもしれない，何等かの石同士を打ち合わせての発火も摩擦火の一種であろう。

自然火を活用しての火の使用は約30万年前のホモ・エレクトゥス・ペキネンシスで確証されている，というのが通説だったがＬ・ヴィンフォードはこれに強い疑問を投げかけている。他方，それはアウストラロピテクスが160～150万年前に既に行っていたという説が，Ｒ・リーキーやＢ・ブレインによって唱えられてもいる。厳密に言えば，火の使用がいつ頃からどのように始められたかについては未だにはっきりしていない。

ところで火の征服，力学的運動の熱への道具を用いたこの転換は，それによってヒトを最終的に動物界から分離させたのであるから，それと動物の訓養を指摘してから以後の論述はホモ・サピエンスの進化に関することなのである。

18）　自然全体が支配者で，ヒトは隷従者の地位に甘んじている。

19）　ここに「威力」と訳した原語はMachtであるが，ヘーゲルはこの外に普通はKraftを使用している。しかし在り方論で用いているKraftと区別するには「威力」を使った方がよいと思う。エンゲルスが先に記していた「完全な能力」の原語はMachatvollkommenheitであった。

また「外面化」と訳した原語は，一般的に「発現」と訳されているÄußerungであるが，次の「外面」という論理学的カテゴリーとの連関を考慮してこのように訳した。

20）　牧野紀之『マルクスの読書会』①，（鶏鳴出版，1972年），50ページに，エンゲルスは着物の起源を防寒に求めているが，この説ではずっと熱帯に住んでいた人々にとっての着物の起源は説明できないことになる，として参考にヘーゲル『小論理学』第24節への補足３を次のように訳し紹介している。すなわち「恥〔を知ること〕の中には人間がその自然的で感性的なあり方〔動物的なあり方〕から分かれて〔まさに人間になって〕いるということが現れている。動物はこの区別まで達しないので恥を知らないのである。したがって，着物〔着物を着るということ〕の精神的・人倫的な起源もまたこの恥という人間的な感情〔人間にのみ属する感情〕の中に探し求められなければならず，〔防寒といったような〕たんなる自然的な欲求は，それに比して第二義的なものにすぎないのである」。

ホモ・ネアンデルターレンシスは氷河期のヨーロッパにおいて，年平均気温氷点下１℃とＡ・ウォーカーらに推定された極寒棲息気候へ過剰適応し，その後の地球温暖化の煽りを食って２万７千年前に絶滅してしまった，とされているから彼らが着物を着ていたとは考えられない。前頭葉の発達を見せ始め，それまでよりずっと高度な思考能力を有する現代型ホモ・サピエンスになってから着衣の習慣が発生したのであってみれば，極寒のベーリング海峡を渡った時には必要に迫られ工夫を凝らして着用し，アマゾンの裸族は高温多湿な環境への衛生上の適合を考え脱衣し，一年中暑い地方で着物を着ているのは文字通り恥を知ったからかもしれず，確かに「たんなる自然的欲求」に一義的に支配されてのことではなく，思考活動が媒介してのことであった。現代型ホモ・サピエンスからは食う寝るところに住むところ，欲求充足のことごとくに思考が介在するのが基本的。

それだからこそエンゲルスは，ヒトは新しい欲求を作り出すとともに，目的意識を一契機とする「新しい労働領域と新しい活動を作り出す」と述べているのである。

21）　外面たる新しい労働分野と内面たる新しい活動は，内外関係という一形式の二契機であって本質的に同一だと本文に記載したが，これと論理的に整合性を得る訳として牧野紀之，同上書，51ページの注49における，このdamitは「新しい欲求が生まれた」ことを受けて，「新しい労働領域と新しい活動」全体にかかっている，とする指摘に従った。

22）　産業の諸部門への分割という利益社会内分業と，さらに作業場内分業をも包摂している，利益社会的分業体制を意味している。

23）　「ここの部分は，伊藤（嘉昭）氏も現行国民文庫版『猿が人間になるについての労働の役割』も，菅原・寺沢共訳の国民文庫版『自然弁証法』も，『各個人としてだけでなく社会の中にあるものとしても』という句をうしろにかけ『人間が……できるようになった』にかけているが，明

白な誤解である。加藤正・加古祐二郎共訳の旧岩波文庫版『自然弁証法』は『手と発声器官と脳の協働作用』にかけて訳している。田辺訳の現行岩波文庫版はまちがっている。最も古いものだけが正しく，後から出たものの方が後退しているというのは，後輩が先輩から学ばないからである」〔牧野紀之，同上書，50-1ページ〕。

24）　法，政治，宗教，と列挙されたこれらの形象，すなわちイデオロギーというバルコニーのようなもの，言い換えれば「観念論的上部構造」〔『ドイツ・イデオロギー』，前掲書，36（原）ページ〕は，ヘーゲル『精神現象学』に取り上げられている，現実に対して無関心な抽象的思考の立場に止まるストア主義に対応している。

25）　ここのundは「相反」のニュアンスを表している。

26）　エンゲルスは最も唯物論的なダーウィニストでさえをも，自然研究者（Naturforsher）と呼んでいて自然科学者（Naturwissenschaftler）とは言っていない。彼らは観念論的世界観に影響されているからというだけでなく，ざっと『自然の弁証法』の原書に目を通しただけでも気づくはずだが，弁証法的な総括を為し得ないで，経験的な研究にしか従事し得ないような者を科学者と見做すわけにはいかないからである。エンゲルスは科学者という名にふさわしいのは，当時ではマルクスと自分だけだと自認していたのである。このことを手短に知りたければ，エンゲルス 1885「反デューリング論・三つの版の序文」II，全集，第20巻のうち特に，10-4（原）ページを精読せよ。経験的な研究を実証的に積み重ねただけでは科学的レベルには到達し得ず，概念的把握に到達するには理性的思考，内在的弁証法が必要だと強調しているのである。

27）　エンゲルスやマルクスのイデオロギーは観念論のことであって，レーニンが言う「科学的イデオロギー」といった用語法とは意味が違う。双方ともに思考は存在と一致していること，一つになっている状態という意味での統一（Einheit），つまり機能的同一性を承認してはいるが，エンゲルスは機能的内容的同一性の立場に立って，機能的形式的同一性に立つレーニンとは異なりイデオロギーを次のように説明している。

「イデオロギーというものはひとたび存在するや否や，与えられた観念的な素材と結び付いて，その観念的素材を一層発展させるものである。もしそうでなかったらそれはイデオロギー，すなわち観念を独立して発展するもので，自己自身の法則にしか従わないものとして取り扱うイデオロギーとは言えないだろう。こうした思考過程が進行するのは人間の頭の中であるが，その人間の物質的生活の諸条件が結局は，この思考過程をも条件付けているということはこれらの人間には意識されない。というわけは，それを意識してしまったらイデオロギーは完全に終わってしまうだろうからである」〔エンゲルス 1886『フォイエルバッハ論』，全集，第21巻，303（原）ページ〕。

「世界の研究についての一般的な結論というものは，この研究の終りに出てくるものである。だからそれは原理や出発点ではなく，結果であり帰結である。このような結果を頭の中から構成し，それらを基礎としてそこから出発し，さらに進んでそれらの基礎から世界を頭の中で再構成するのがイデオロギーであって，これまでは唯物論でもみなそれにとりつかれていたのである。なぜなら，思考と存在の関係について，唯物論は確かに自然界でのそれはいくらか明確に知ってはいたけれど，歴史におけるそれを知らず，思考は全てが史実的物質的諸条件に依存していることを見抜いていなかったからである」〔エンゲルス 1876「『反デューリング論』のためのエンゲルスの準備労作から」，全集，第20巻，574（原）ページ〕。

かくして，21世紀に至るまでのマルクスとエンゲルスの論述に関する言及はほとんどが，悟性的思考という常識的な観念的素材と結び付いて，その観念的素材を一層発展させたものであるがゆえにイデオロギー，つまり観念論にしかすぎなかったことが分かる。

「思弁的論理学にはたんなる悟性的論理学が含まれているので，これは前者からすぐにでも作成され得る。そのためにはそこから弁証法的な

ものと理性的なものを取り除きさえすればよい。そうすれば思弁的論理学は普通の論理学と同じものに，すなわち，有限な状態であるにもかかわらず，無限なものと見做されている種々雑多な観念諸規定から構成された，まさにお話というべきものになってしまうのである」〔ヘーゲル『小論理学』第82節〕。

逆に，弁証法的唯物論を弁証法によって説明されるといい年をした大人でも，と言うより常識的な悟性的思考に飼い慣らされてしまった大人だからこそと言うべきか，科学的方法ではほとんど研鑽を積むことなく「何だか分かんなーい」を繰り返す。つまり「分からないこのことは，分からないという質のものである」と踏ん反り返って偉そうな顔をする。だがヘーゲルは『小論理学』第115節の注釈で「こういう発言は正当にもバカと見做されていて，このことは万人の経験が指摘しているところである」と述べ，愚にもつかないこんな同一律が依然として大手を振って罷り通っているのが，悟性という常識的思考による学校の講義というものだと非難していたのである。19世紀は第一，四半期のことであった。

28） 以上でヒト化の本質を反省し終えている。エンゲルスはヒトの祖先が森林から平地へ放散し，さらに現代人へと身体的に進化していった経過を次の順で反省した。

① 食い尽くし→植物性食料の多様化→ヒト化に必要な化学的諸条件の多様化……自然的進化

② 食料生産・肉食→火の征服→労働の発展・普遍的な放散……ヒト固有の進化

ヒトは現在，いかに自然から脱け出しこれを支配しているかのように見えても，あくまでも自然の一部であることを前提にしているので，自然的進化をヒト固有の進化に先行させて説明している。そして食料生産がヒトの可能的本質，肉食が根拠となってヒトの脳を完全に発達させ，発火技術を開発し，これが転機で労働は精神的労働を発生させるまでに発展，人類は普遍的に放散することができたと叙述しているのである。

Immanent Dialectic in 'The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man' (2)

Yasuhide SUDO＊

Abstract: This study elucidates the logic of the section on self-awareness or essence in 'The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man' by F. Engels. In its content, he epistemologically examined isolated results of the study on physical evolution from ape to man in connection with the development of labour, and logically explicated that investigation. My research examines the self-consciousness or essence in the dialectical categories and is divided into three parts: ① the self-certainty, or the essence, ② the independence and dependence of self-consciousness, or the phenomenon, and ③ the freedom of self-consciousness, or the reality.

keywords: self-certainty, to browse over feed, labour in the proper sense, meat diet, perfect development of brain, independence and dependence of self-consciousness, harnessing of fire, domestication of animals, particular spread of man, freedom of self-consciousness, development of labour, brainwork.

＊Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University